慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「はちかつき・上」解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Tohru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1997
Jtitle	三田國文 No.25 (1997. 3) ,p.31- 36
JaLC DOI	10.14991/002.19970300-0031
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19970300-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

［はちかつき・上］解題・翻刻

石川　透

解題

ここに紹介する［はちかつき・上］は、「増訂町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』、一九八二年八月）の『鉢かづき』の項に、

B御巫清男旧・奈良絵本挿絵欠　横二冊

（『室町時代物語集』三、一九三九年二月）

と記されている御巫本系統の奈良絵本である。御巫本は、数多い『鉢かづき』の写本版本のうち、唯一の異本系統の孤本として知られていた。近時、秋本鈴史氏により、京都の角屋に、御巫本と同系統の『鉢かづき』が存在することが明らかになり、「室町物語『浄瑠璃姫物語』と『鉢かづき』」（『角屋研究』第六号、一九九六年八月）に翻刻紹介された。期せずして、孤本といわれていたものに二つの伝本が出現したのであるが、御巫本は挿絵が欠け、角屋本は所々の本文と挿絵が欠け、筆者架蔵本は冒頭と下巻が欠けているという具合に、完全な本はない。しかし、三本を合せて考えると、この系統のある程度の姿が復元できそうである。

この御巫本系統の三本は、いづれも江戸時代初期から前期にかけて製作された、横型の奈良絵本である。それぞれの本文の筆跡は異なるものの、角屋本と架蔵本の挿絵の雰囲気などはよく似通っている。御巫本は挿絵が抜き取られているが、その挿絵の存在した箇所は、三本とも全く一致している。このように外面的には非常によく似ており、ひょっとすると同一工房で作られた可能性もあろう。

この三本を同一系統としたように、本文的には極めて近く、三本の校異をとると、同じ誤写と思われる箇所も見受けられる。概して御巫本と角屋本が近く、この二本に共通する脱文も複数存在する。また、三本それぞれの誤写もあり、どの本が勝れているとはいいきれないようだ。

本書の書誌は、以下の通りである。

所蔵、架蔵

形態、横型袋綴奈良絵本、一冊

時代、［江戸初期］写

寸法、縦一七・五糎、横二五・九糎

表紙、後補金色表紙
外題、左上後補題簽「奈良絵」
内題、ナシ
料紙、斐楮交漉紙
行数、半葉一四行
字高、約一三・五糎
丁数、一六丁
挿絵、八頁
奥書、ナシ

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「 」『 』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。また、破損による欠字は□で示した。挿絵の掲載は、別の機会に行ないたい。

［はちかつき・上］

（冒頭欠）

われら、もろともに、いまはやらせ給ふ、きよみつてらのくわんをんにまいり、百日さんろう申、しそうをくやうして、あゆひをはこひ、たうをこんりうし、こゝろのをよはんほとは、かんたんをくたきて、きせひ申さんに、なとか、かなはさるへき。おほしめしたち給へかし」と、のたまひけれは、

［挿絵・第一図］

女はう、よろこひ給ひて、おもひたち給ふ。

きさらきのはしめのころよりも、きよみつてらに、百日さんろうし給ひけり。さるほとに、心のをよふほとの御きせひ、心もことはものこさすはんへりける。

すてに、百日と申、あかつきの御夢想に、八十はかりのらうそうの、きよはらの津のかみ、ゆきかたかまくらに、たゝせ給ひて、「いかに、なんしか申は、ふひんなれとも、三せん大せん世界をたつぬるに、なんしか子になるへき物は、さらになし。それをいかにといふに、なんしは、さきの世に、うしにてあり。せんさいのはなを、つのにておるのみならす、ほりうしなひしゆへにより、なんしに子といふ物なし。また、なんしかつまは、さきのしやうに、くちなはにてありしか、こゝかしこの、みたうのむねうつはりに、小鳥とものすをかけ、子をうみあたゝめしを、おやもろともに、ふくしたりしとかにより、汝か子といふ物さらになし。わかちからにはかなふまし。やまとの国、はせてらのくわんをんにまいりて、きせい申せ」と、御しけんあらたにかうふりて、ゆきかたは、うちおとろきて、女はうにかくとかたりたまふ。

［挿絵・第二図］

女はう、大きによろこひて、御夢想にまかせて、やかて、はつせへまいりつゝ、百日さんろうとそ聞えける。さま〴〵のしゆくはんは、申にをよはす、きねん、つつしんてし給ひける。さるほとに、すてに、百日にまんしける、やはんはかりに、あらたに、くはんをんの、ようかんひれいの女はうに、けむし給

ひて、心もおよはぬ、からのおり物の大くちに、まきゑの手箱のそてなりなるか、中には何か入たるやらん、をも〳〵としたるはちに、から物と見えたるはち、うす〳〵としてうつくしきか、ふつうやうのせいより、大なるをとりそへて、つのかみ夫婦に、給はるとの御しけん有ける。「たゝし、なんしか申子に、あたゆへき子たねなし。しかれとも、女子を一人あたゆるなり。此子七さいにならんとき、はゝのなやみあるへし。そのとき、かのはこを、ひめにいたゝかせ、そのうへに、はちをうちきせ候へし。はゝのいのち、うするとも、はゝのけうやうともなり、ちゝのために、けうしともなり、世にありかたき、めいしんなるへし」とて、はこを給はりける。ゆめさめて、ふしきにおもひて、いよ〳〵よろこひのおもひをなして、見給へは、すなはち、かのはちはこ、ふうふのまへにけんしたり。いそき、ふうふともに、よろこひのらいはひまいらせて、御しゆくはうにかへり、きやうたらにをみてゝ、申たてまつるには、くはんけんのほうゑめてたくとりおこなひ、こかねしろかね、たまのふせを、ひきたまふは、めをおとろかすはかりなり。ほうゑすきけれは、御けかうとそきこえける。

［挿絵・第三図］

さるほとに、きたのかたの、月のさはりとまり、こゝのつきのくるしみ、あたる十月になりけれは、さんのおひをそときたまひける。御しけんにたかはす、世にうつくしき、ひめきみにてそおはしける。十六人のもり、めのとをつけて、いつきかしつき、もてなしたまひけれは、日にまし〳〵て、見ます事のみそ、おほかりける。

さても、とし月をゝくりたまふほとに、ひめきみ、七さいと申はるのころ、きたの御かた、にはかに、やまふつきて、したひ日ゝに、大事になりたまひて、日かすをゝくりけれは、いまはかきりと見え給ふ。かすのたからをとゝのえて、うけんのかうそうに、大ほうひほうを、おこなひける。しゆくくはんかすをつくして、いのりたまふ事、かきりなし。されとも、しやうしむしやうのならい、ちやうこうかきりあれは、ちからなし。

三十日と申とき、ひめきみをちかつけたまひて、おほせられけるは、「わか身は、いまをかきりとおほえたり。のちの世をは、ひめをたのむそよ。さても、これに、くはんをんのたまはりし、はちはこあり。御ちかひにまかせて、ひめ君にとらすへし」と、おほせありしかは、御まへの女はうたち、「しかるへし」とて、からのをり物のふくろより、はち箱をとりいたし、蒔画絵の手はこを、いたゝかせまいらせて、そのうへに、はちをほひけり。ひめ君を見まいらすれは、御まゆもひとへにつほみたり。さても、きたの御かた、かくなん、

くはんをんのちかひめてたきはこなれは
いまそひめにはいたゝかせける

とゑいしたまひて、「いまは、いたゝきものとれ」とおほせけれは、

［挿絵・第四図］

つのかみ、はこをとらんとし給ふに、そのはち箱、御くしにとりつきて、とられす。「これは、いかなる事そや」とて、かいしやくの人々、あまた、よりあつまりて、とりけれとも、ひめ君、「あら、いたや」とて、なきかなしみ給へとも、なをも、ひきあ

けけれは、「いまは、いのちをとるや」とて、さけひかなしみ給ひけれは、ちからなくたゝおきぬ。

これをみ給ひて、大きになけきかなしみて、「われこそ、かくなり候とも、かゝるふしきのならひあらし。しやうしてしするは、さため有事なれば、いたくななけき給ひそよ。我身もおとらす思へとも、あひへつりくは、つねのならいとなそらへてのみ、かさぬる。いつれのつみのむくひにて、世になき程のかたは物と也、はゝにさえ、はやくはなるらん。くわほうすくなき身とむまれきて、物思ふ事のむさんさよ。神にも仏にも、申事かなへはこそ、人事に申候はめ。なんちかうちの御てらなれは、はつ瀬のくはんをんにまいりて、きせひ申てみん。いたくなゝけき給ひそ」とて、御ひさちかくいたきて、とかくなくさめ給ひけるそ、あはれなる。

さて、きたの御かたのけうやうに、七日〳〵、三十五日、四十九日、百ケ日まて、さま〴〵のふつしを、心のまゝにとはせ給ひける。姫君は、母この恋しさに、御はかにまいりて、「たゝ、我身をむかへとらせ給へ。たとへ、むけんならくのそこまても、おなしくけんに、あつかりまいらせは、いかにうれしくさふらふへき。又、此かたは物、うしなひてたひ給へ」と、手をあはせ、ふしおかみ、なき給ふそ、あはれなる。

津のかみは、日かすつもるまゝに、いとゝ、きたのかたの御事、思ひいてゝ、かくなん、

あさからぬちとなりしつまもけに
わかれとなれはまつとしもなし

さても、姫君は、あかぬ思ひの、いつれもおとらす、一かたならぬ思ひのあまれは、かくなむ、

なてしこの花を見るにもわすられす
このはゝちりて野へのあきかせ

かやうにゑいして、日かすをゝくり給ふほとに、第三ねんの御ふつしをすきけれは、したしき人々、あつまりて、「いまは、何になけかせ給ふとも、かなふまし。いかならん人をも、つまとさためて、姫君をもそたてまいらせ、すきにし人のけうやうを、いとなみ給ひ候へかし」と、さま〴〵すゝめまいらせ給けれは、「いまは、さもありぬへし」とて、ちかきほとの人のむすめをむかへとりて、すきさせ給ふほとに、姫君は、それにつけても、なけきの色まさりける。日ころにはにつ、いしやうもわるく也給ふ。かいしやくの人もなく、あけてもくれても、「はちかつき〳〵」とよはれて、よき人にもいやしき物にも、おもひさけられて、「はちかつき」とそ、いはれたまふ。

[挿絵・第五図]

されは、姫君は、しもゆきともきえうせはやと、おほしめしけれとも、それもかなはす、身のおき所のなきにつけても、たゝあけくれ、なくよりほかの事そなき。わか身のかなしさに、人めにかゝらしとし給へは、継母の、「あら、かたはらいたや、人かましや。たゝいま、人に見せて、わらはせ」、にくきことにそし給ひける。かゝりけれは、はちかつき、毎日、はゝの御はかに、まいり給ひて、ひとへに、「わか身を、むかへとらせ給へ。あまりに、継母の、にくみいとはせ給ふも、かなしけれは、はや〳〵、ひと所にむかへさせ給へ」とそ、なき給ひける。

継母、これを見給ひて、「われをのろひてこそ、はゝのはかに

まいり、てんにあふき、地にふし、むねをこかし給ふらん。けふよりのち、かみや仏、はかにまいるへからす。もし、なをも、まいり給ふ物ならは、ふしつけにし、いのちをたつへし」とそ、の給ひける。姫君、我いのちのおしきとは、おもひ給はねとも、さすか、ちゝの御事をおもひ、なこりをおしみて、おしからぬいのちをすてかたく、心のほかに、たう、てらにもまいり給はす、あけくれ、はゝこせんのためとて、念仏申、のちの世の事を、いのり給ひける。

ある時、けいほ、つのかみにに、むかひての給ひけるは、「かやうに申候へは、人めわろく候へとも、おもふ事を申さねは、いかゝにて候。あまりに、はちかつきか、物をぬすみ、みこにとらせ、われをのろひ候へは、そのけにより候て、わか身も、やまひかましく、ゆめ見もあしく見え、心もみたれ、此いゑのうちに、いたくも候はす。心むつかしく候へは、はちかつきを、いつかたへも、とをくうしなはせ給へ。そのきなくは、わか身をうしなひたまふか、また、ふちかわへ身をなけ、この世になき身とならん」と、の給ひしかは、

［挿絵・第六図］

津のかみ、これを聞給ひて、しはらく、とかくの返事もし給はす。しきりにさま〴〵せめられて、「ともかくも、おほせ候はんやうにこそ」とて、さしきをたち給ひて、ひめ君をちかつけ給ひ、「いかに。なんしをちかつくる事、へちのしさいにあらす。御身かはゝにて候人に、わかれたてまつりて、そのゝちは、なんしをこそ、たくひなくおもひ、一日へんしも、たちはなれかたく思へとも、あまりにすきて、ふとうの心を、又よにもなき事のやうに、けいほをにくみ、みこかんなきに、たからをぬすみとらせて、のろいはんへると、きゝしかとも、二人ともなきこなれは、きかぬやうにもてなして、すきゆけとも、いまは、人めあしくなりぬ。うたてしき名のみたつるも心うし。いかならんしま、ゑんこくへもうしなひ、ふち河へもしつめなんと、けいほはたくみはんへれとも、わかゆるしなけれは、いまゝてありしなり。みやこはひろき所なれは、四条のつしにすておかは、たれかは、あはれむ人かなからん。あすは、みやこにすてをくへし」と、なく〴〵の給ひけれは、とかくの御返事にをよはす、ひれふして、なくよりほかの事そなき。

［挿絵・第七図］

「さては、我身もすこさぬ事なれとも、けいぼのさんそうによりて、うしなはれまいらせん事のかなしさよ」とて、めのとのじしうを、ちかつけて、ちゝ津のかみの御かたへ、すこさぬよしを、ちんし給ひけれは、まゝはゝ、人をかたらひて、はちかつきをは、きやうへのほせ、四条のつしにすて給ふ。津のかみは、これをは夢にもしりたまはす、ひるはひめもす、よるはよもすから、姫君の御事を、なけかせ給ひける。

あるとき、「ひめきみ、いつくへゆきけるやらんと、よにこひしく思ふに、見えさるは」とて、めのとともに、たつね給ひけれは、「此あきのなかは、ゆきかたのおほせとて、おそろしけなる物ともまいりて、くそくしまいらせて、『みやこのかたへ、をくり、うしなひまいらせよ』とのおほせとて候しかは、『われも御ともにまいらん』と、申候しかは、『ゆめ〴〵かなふまし』とて、とめ給ひ候へは、ちからなくとまりて候」とそ申ける。ゆ

きかた、なみたにむせひ給ひ、「さては、われもしらさる事を、女はうのはからひにこそ、すてられける事のむさんさよ。いかなるふち河、とをきしま、野ゝすゑ、人もかよはぬところにか、すてをきぬらん」と、ふししつみ、なけき給ふそあはれなり。

［挿絵・第八図］

さるほとに、はちかつきは、四てうのほとりに、まとひありき給ひけれは、人々おほくあつまりて、「なんしか、いたゝきたる物は、なに物そ。いてみて、はけ物ならは、あらはさん」といひけれは、「はけものにはあらす」と申ける。

さるほとに、人おほくはしりあつまり、ふしきのおもひをなし、はちをとりてみんとしけれとも、とられす。「これはいかにや」とゝひけれは、「はちかつき」と申ける。「われ七さいのとき、このはちを、なにとなく、いたゝきて候へは、すいつきてとられす候」と申けり。「さもあれ」とて、とりあけけれは、その身、ともにとりつきあかりける。きせん上下のなんによ、□□□□□□□ちうつふき見れは、□□のほと、十四五はかりなるか、いろしろく、めのうちあさやかに、かみかたち、ふせひ、まみ、くちつきにいたるまて、うつくしきによしなり。「いつくの物そ」とゝひけれは、「津のくに、かたのゝほとり」とはかりそ申ける。「さて、ちゝはゝはなきか」とゝひけれは、「はゝは、七さいのとき、むなしく成給ひぬ。ちゝは、ましませとも、かゝるかたはになり候へは、継母の、もろともににくみ給ひて、捨られ候へは、かやうにまよひありき候」と申けれは、みやこの人のやさしきは、「はちかつき〳〵」とよばれて、あさゆふわひしめす、やしなふ人もあり。あるひは、いしやうをきするものもあり。日ををくり、夜をあかしける。